アクセシブルデザインの総合情報誌

インクル

The Periodical of Accessible Design

"Incl."by The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）

目次　contents

『旅を楽しむ「10のコツ！」と便利なグッズ』展 開催
（三好泉） 2

東南アジア３カ国で不便さ調査開始（金丸淳子） 4

平成26年度アクセシブルデザイン（AD）フォーラム開催
（森川美和） 6

「まつり」と「共用品」の距離が縮まった
第12回 千代田区「ふくしまつり」（星川安之） 7

「文京ボランティア市民活動まつり2014」
共用品ブース初出展！（森川美和） 8

ISO/TC173/SC7でWG会議開催（松岡光一） 9

公益財団法人すこやか食生活協会30周年記念事業（森川美和） 10

＜キーワードで考える共用品講座＞　第84講
「社会の要請と共用品（その２：市場の失敗を補う）」（後藤芳一） 11

＜事務局長だより＞
ルールを「作る」、ルールを「改定する」で、
変えることができるコトやモノ（星川安之）
共用品通信
奥付 12

共用品推進機構
The Accessible Design Foundation of Japan
ADFJ

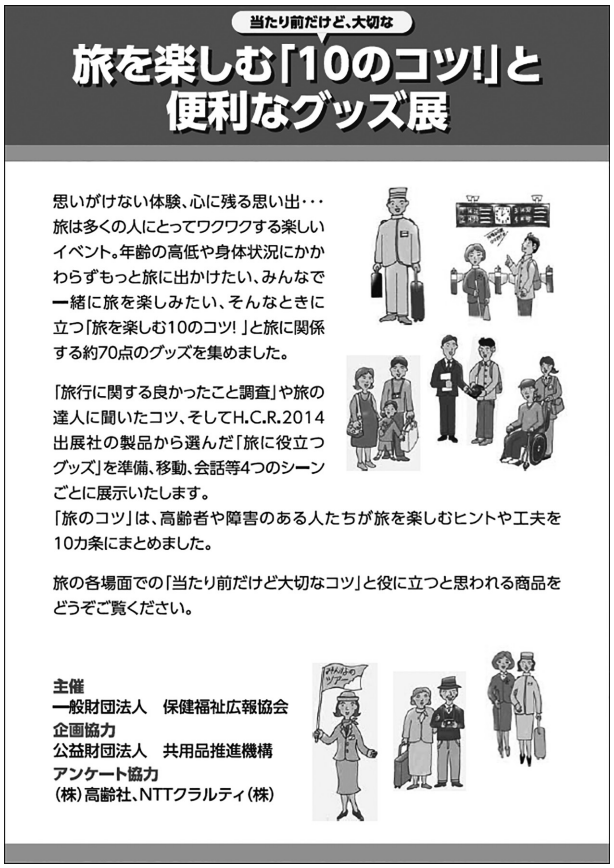
No.93
2014（平成26）年11月25日

第41回国際福祉機器展　H.C.R.2014
『旅を楽しむ「10のコツ！」と便利なグッズ』展 開催
―国際福祉機器展/主催者特別展示コーナーの企画・実施に本機構が協力―

10月１日（水）～10月３日（金）の３日間、東京・有明の東京ビックサイトで国際福祉機器展が開かれた。共用品推進機構は、昨年に引き続き主催者からの依頼を受けて特別企画「高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー」の企画・監修を担当した。高齢者・障害者を対象とした調査やアンケートをベースにまとめた「旅のコツ！」のパネルと、出展各社の協力で集めた約70点のグッズを紹介したコーナーには、初日のオープン時から最終日までたくさんの方々の来場があり、大変活気のある展示となった。

今年で41回目となる国際福祉機器展（主催：全国社会福祉協議会/保健福祉広報協会）は、海外企業55社を含む585社が出展するアジア最大の福祉機器展である。会期中はあいにくの雨模様の日もあったが、３日間通しての来場者は12万7651人、車いす使用の方など障害のある方も数多く来場していた。

共用品推進機構では、2009年から主催者の要請を受けて特別企画コーナーの企画・実施に協力してきた。昨年の「目からウロコ」展、一昨年の「片手で使えるモノ」展はともに大きな関心をよび、たくさんの方々にご来場いただいた。



（写真：メインの看板）

■今年度のテーマは「旅行」

高齢者や障害者が気軽に旅行にでかけ、旅を楽しむためのアイデアや準備方法、持って行くと便利な製品の紹介・展示を企画し、コーナー名称を『高齢者・障害者等の生活支援用品コーナー＜旅を楽しむ「10のコツ！」と便利なグッズ展＞』とした。高齢者・障害者の旅のコツをまとめるために、昨年本機構で実施した「旅行に関する良かったこと調査」報告書に加え、新たに旅行に関するアンケート調査も行った。アンケートは、（株）高齢社の「高齢者なんでも

（写真：会場入り口）

調査団」とNTTクラルティ（株）の協力を得て、約50名の高齢者や障害のある方に旅のコツとアイデア、持っていくと便利な製品を尋ねた。この回答やコメントをもとに作成した「高齢者や障害者が旅を快適に楽しむコツ」を、＜準備＞、＜移動＞、＜会話＞の場面と＜旅のモノ＞に対応させて、当たり前だけど大切な10カ条のコツに絞り込んだ。

■旅を楽しむ「10のコツ！」

たとえば旅の＜準備＞では、「両手が使える様に、リュック・ウエストポーチなどを使う（高齢者）」、「旅行かばんは、軽くて扱いやすく、ぶつかっても痛くないソフトタイプのキャリータイプのバッグを使う（弱視）」、「手話で話せるように、両手が自由になるカバンを使っている（聴覚障害）」などのコメントから「旅の準備　①のコツ！：手で持つ荷物を少なくする/荷物を少なくし、手を空けておくと、杖や傘を使う、手話で話す、メモをとったり、カメラを使うときなど便利です」とした。そのほかの＜準備＞のコツは、「②のコツ：折りたためるものを選ぶ/持ち物を小さくするには、できるだけ折りたためるものやコンパクトなものを選びましょう」など４つのコツに、＜移動＞のコツでは「⑤のコツ！：雨の準備を忘れない/レインコートなどの雨具を活用、気分を変えて雨の日を楽しもう」など、＜会話＞のコツは、「⑧のコツ！：伝えやすいものを使う/しっかり伝えるにはメモが重要、あらかじめメモや会話ボードなどを用意しよう」、＜モノ＞については「⑩のコツ！：いつも使うものを/いつも使い慣れたものが一番。いつものものが一つあるだけでも安心して旅が楽しめます」などで10のコツを構成した。これらのコツは、調査・アンケートから選んだ旅のアイデアやコメントとともにパネル化して展示した。

（写真：多くの来場者でにぎわう展示会場）

■旅に便利な製品を紹介

コーナーではこれら「10のコツ！」に関連する旅に便利な製品を出展社の製品から約70点選びだして紹介している。たとえば、＜準備＞の場面では各種のバッグ、＜移動＞のコーナーでは各社から集めた杖など15点を実際に試してもらえるように展示した。背中の丸くなった方用に工夫されたグリップの杖や夜間の安全を確保するライトや信号付きの杖などである。また、雨の日の準備では、小さく折りたためる長靴、傘のホルダーや車いす用のレインコートも展示した。旅に便利なグッズを、一社だけでなく複数の企業から集め、実際に手に取って試してみられるように展示するという、この方法はとても好評であった。

■多くの来場者の声は

年齢や身体状況にかかわらずもっと旅に出かけたい、みんなで一緒に旅を楽しみたい、そんな思いで来場された方々からは「楽しい、参考になった」、「資料がほしい」などの声も聞かれ、パネルや展示製品のメモを取りながら、熱心に一つひとつ試していたのが目に付いた。

なお、今回の展示商品の一部は、事前取材のあった旅行雑誌「じゃらん　凹凸の少ない旅＆宿ガイド/車いす・足腰が不安な方のバリアフリー旅：保存版（10月からセブンイレブンで発売）」に紹介されている。

最後に、本展示にご協力いただいた各企業及び主催者の保健福祉広報協会の皆様に感謝いたします。

（三好泉（みよしいずみ））

東南アジア３カ国で不便さ調査開始
～ミャンマー、インドネシア、ベトナムで、視覚障害者不便さ調査の最終調整～

■概要
出張期間：2014年10月19～25日
　　2014年11月６～８日
訪問団体：３団体
ミャンマー盲人協会（写真１）
インドネシア女性障害者協会（写真２）
インドネシア盲人協会（写真３）
ベトナム盲人協会（写真４、５）
出張者：共用品推進機構 星川安之、金丸淳子

今年１月に３カ国、ミャンマー、インドネシア、ベトナムの障害者団体を訪問し、障害のある人達の不便さ調査を共同で行うことになり、調査方法や調査内容等を確定するために再度、訪問した。当初、視覚、聴覚、肢体不自由の人たちに関して調査を行う予定だったが、共用品推進機構としても東南アジアで不便さ調査を行うのは初めてのこと、３カ国でも障害当事者本人に調査を行うことに慣れていないということなので、共用品推進機構が行ったように、第一弾として、視覚障害者を対象にした不便さ調査を行うことにした。

【ミャンマー】

前回の会議では、視覚に障害のある人、日本で研修を受けて日本語を話せる人がたくさん参加して議論したが、今回はミャンマー盲人協会の会長ともう１名のメンバーの２名で、調査内容に関して打合せを行った。ところが、前回の会議の際に了解を得たものと思っていたことが、全く会長には伝わっておらず、初めから一つひとつ確認することになってしまった。また、今回も通訳を交えての会議だったが、突然、会長が英語で話し始めることが度々あった。

通訳者の話によると、会長はミャンマー北部の方言があり、通訳にも理解できない部分があったため、要領を得ない会話になっていたようだ。日本でも南北で言葉が異なり、聞き取れないことがあるのと同様だ。最終的には調査内容に合意して、調査を始める準備ができた。

【インドネシア】

今年１月には、インドネシア女性障害者協会とインドネシア盲人協会を一度に訪問したが、今回は日程調整ができず、10月に女性障害者団体、11月に入りインドネシア盲人協会を訪問し、会議を行った。

◇インドネシア女性障害者協会

（写真１）

（写真２）

（写真３）

（写真４）

インドネシア女性障害者協会では、１月の会議の時に、シャンプー容器や缶ビールの点字を例に挙げながら共用品の説明したためその印象が強かったせいか、包装容器に関する不便さ調査を行うと認識していた。そうではなく、日常生活に関する不便さ調査を行うと訂正し、そのあと、アンケート調査の質問項目と内容について議論した。会議は10時から午後３時までの長時間になったが、有意義なものであった。

（写真５）

◇インドネシア盲人協会

改めて、11月７日にインドネシア盲人協会を訪問し、調査の計画を話し合った。同協会としては、インドネシアでは障害者の「安全」を最優先に考えているので、障害者の不便さと同時に「安全」についても調査したいという意見が出た。そのため、内容をほかの団体とは大きな変更はしないが、質問の文章の中に一部「安全」を含めることとなった。（写真３）

【ベトナム】

今回の調査は、視覚に障害のある人を対象にした団体であるため、前回訪問したハノイの肢体不自由者の団体から紹介され、ベトナム盲人協会の会長に会うことになった。初めての訪問とあって、共用品推進機構の活動を理解し、不便さ調査に協力していただくことができるかどうかが、一番心配であった。しかしながら、事前に電話やメールで説明していたことと、相手が不明点を度々質問してくれたことが、早い理解につながったと考える。

ベトナムでは、ランチを一緒にと誘われ、レストランに向かった。会長はでこぼこの歩道を手引きされながら歩いていたが、靴はハイヒール。日本では、なかなかハイヒールを履く視覚障害者に会うことはない。足首をひねりながら、時々つまずきながら歩いているのはこちらの方だった。

３カ国で会議を行ったが、まだ、調査内容について合意したばかり。どの国も、障害者に対する調査を行った経験はなく、不安がいっぱいで、それぞれの団体からメールやFACEBOOKでアンケートが送付されるのはこれからだ。各団体からも、調査の進捗は頻繁にお知らせしますというコメントがあり、こちらも期待と不安が入り混じっているところである。

（金丸 淳子（かなまるじゅんこ））

平成26年度アクセシブルデザイン(AD)フォーラム開催
～AD・福祉用具関連情報報告～

アクセシブルデザイン推進協議会（ADC）は、年に１回、AD、バリアフリー（BF）、福祉機器等に関して、最新のトピックス、調査報告、規格、普及等に関する情報交換を行っている。
今年度は、平成26年10月８日（水）に公益財団法人共用品推進機構の会議室で行われた。

■関連機関の報告

関連機関の報告では、（独）産業技術総合研究所、（一社）ビジネス機会・情報システム産業協会、（一社）衛生設備機器工業会の活動報告があった。

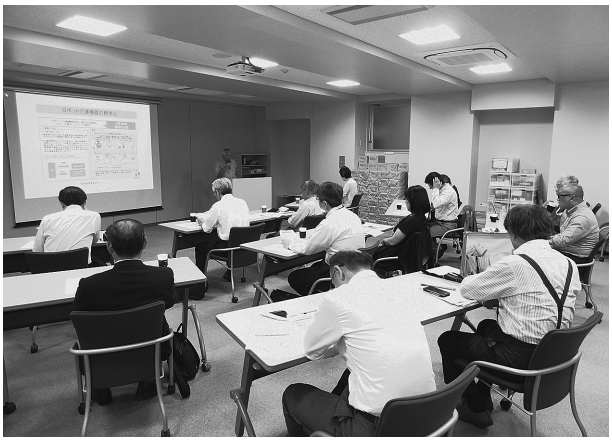
産業技術総合研究所からは、ADにおける当研究所の役割として、「高齢者・障害者の感覚・身体特性の計測」、「計測データに基づくAD技術の開発」、「標準化を通した技術の普及」についての報告、並びに改正した規格や今後見直し予定の規格についての進捗報告があった。

続いてビジネス機会・情報システム産業協会より、『ISO/IEC 10779（高齢者及び障害者のためのオフィス機器の使いやすさの指針）』を取り巻く、各国のアクセシビリティに関する標準や法規についての報告があった。さらに、社会の中で情報技術が重要性を増すに従い、「デジタル・デバイド（情報格差）」が問題となっているが、その解消に向けての取り組み等についても報告があった。

日本衛生設備機器工業会からは、ユニバーサルデザイン（UD）に関するJISやISOの委員会への提案や取り組みについて報告があった。また、住宅トイレに関するUD視点での新しい価値の検討として、当会ホームページ内に、新しいコンテンツとして「高齢社会の住宅トイレ」（トイレナビ http://www.sanitary-net.com/）を展開。介護関連情報や配慮ポイントと、会員企業各社製品の情報が一度に見られる仕組みの紹介があった。

関連団体として、（一社）日本自動販売機工業会、（一社）温水洗浄便座工業会からもご参加いただいた。

（写真：ADフォーラム風景）



（写真：ADCメンバーの発表風景）

■ADCメンバーの報告

メンバー報告では、日本福祉用具・生活支援用具協会、（一財）家電製品協会、（公財）交通エコロジー・モビリティ財団、（一財）日本規格協会、（一社）日本ガス石油機器工業会、（公財）共用品推進機構の７団体がそれぞれ報告を行った。

異なる業界の横断的な取り組み事例は、各団体への良い刺激となり、また各団体が連携しあい新たな事業に着手するきかっけとなる。
今後も参加団体の幅を広げ、情報の共有と普及活動を推進したい。

（森川美和（もりかわみわ））

「まつり」と「共用品」の距離が縮まった　第12回 千代田区「ふくしまつり」

クイズで答える共用品ブース去年に続き大人気コーナーに！

■はじめに

10月11日（土）、千代田区役所で千代田福祉まつりが行われ、共用品推進機構は昨年に続き、２回目の出展をさせていただいた。昨年、千代田区の石川雅己（いしかわまさみ）区長とお話しする機会があり、「せっかく千代田区に事務所があるのだから、参加しないか？」と声をかけていただいたのが、きっかけである。

共用品を知ってもらうために、1993年ソニービルで行って以来、共用品の展示会は数多く行ってきたが、「まつり」と名の付くイベントに参加する機会は昨年までなかった。「まつり」という言葉が放つ華やかな響きと「共用品」との間に距離を作っていたのは、間違いだったと気づかされたのが昨年のこのまつりであった。

事務局の金丸淳子（かなまるじゅんこ）の発案で「クイズ形式」にすることにした初参加のまつりは、当日、開場とほぼ同時に、行列ができる大人気コーナーになったのは、昨年報告した通りである。あれからあっと言う間の一年、今年もまつりの時期となった。去年のようにうまくいくだろうか？の一抹の不安を持ちながらも、続けることに意義があるとの心の声に背中を押され申し込んだ。

（写真：ブース全体）

■まつりの準備

準備説明会が行われ、機構からは森川美和（もりかわみわ）が参加。昨年とほぼ同じ屋外の好位置を確保することができた。場所が決まり残りは内容である。事務局内で議論を重ね、「好評であったクイズ形式」は継続。ただし内容は変えることにした。さっそく金丸が、共用品に関する新たなクイズを作成。右利き、左利きどちらも使いやいトランプ、缶アルコールの点字、軽い力で使えるホチキス、コンセントが、今年のクイズに加わった。

そして、昨年一番人気だった箱の中に入っている立体動物の玩具（アニア：（株）タカラトミー社製）を手触りだけであてるクイズには、今年発売された同社の同シリーズの「恐竜」が加わった。そして、クイズに正解した時の景品も、同社が数多く提供してくれ、準備は万全となり、当日を迎えた。

■いざ当日

数日後に関東にやってくるという大型台風情報を気にしながらもまつり当日は朝から快晴。まさに「まつり日和」となった。事務所から車で荷物を会場まで運び、９時30分から開始の11時20分まで、クイズに関係する「共用品」をテーブルに並べ、パネルを掲示し、クイズ解答用紙を10セット作成し準備完了したのは11時18分。既に、何名かが共用品の前の待っていてくれる。そして開始の時間となり、10セットの回答用紙を10組の人がもち、ある人は熱心にクイズとにらめっこをし、ある人は、家族と相談し、ある人は、機構のメンバーにヘルプを求め、最後のクイズ、触って中の動物や恐竜をあてるクイズに、とても楽しそうに進んでいく。

動物あてクイズは、正解、不正解に関わりなく、年代等も関係なく、楽しむことができるコーナーに今年もなった。そんな共用品のブースは、終了の３時まで一時も、人が絶えることのない空間となった。

中には、「何ですか？このコーナーは？」と、質問してきた人も、クイズだということを伝えると、一つ一つのパネルを熱心に読み、最後書き終わった回答用紙をこちらに渡しながら、「知らないことが多く、本当に勉強になった！」と、画像に残る笑顔で言ってくれる人も多くいた。

（写真：クイズを楽しむ子供達）

■まとめ

開始早々、クイズのイラストを描いてくれた小松昌樹（こまつまさき）さん、そしてタカラトミーで共遊玩具の企画・普及をしている吉田沙也加（よしださやか）さんが、心配して見にきてくれたことに感謝と共に、いざとなったら多くの人に人気コーナーになっていることの証人になってもらえる！ことも嬉しい限りであった。

「まつり」と、「共用品」の距離は、２年間でずいぶん縮まった気がする。となると、この「縮まり」を、多くの機関で共有したいという気持ちが生まれはじめてきている。

他のまつりへの参戦、各地への巡業共用品まつりなどなど。

さて、どこから手を付けようか？　（星川安之（ほしかわやすゆき））

千代田区に続いて文京区でも展開！

「文京ボランティア市民活動まつり2014」共用品ブース初出展！

11月16日（土）文京区民センター（東京都文京区）の「文京ボランティア市民活動まつり2014」に、共用品ブースを初出展した。

文京区でのイベントに参加することに至った背景は、千代田区のイベントを通じて地域交流を図り成功を収めていることを受け、今年６月に開催された弊機構の役員会で「弊機構所在地の近隣地域や、地域イベントの参加が可能で共用品のイベント未開拓の地域などで展開してはどうか」という案が出されたことに始まる。

（写真：会場入り口）

■まずは弊機構所在地に隣接する文京区から

文京区に縁の深い山根隆（やまねりゅう）評議員（株式会社講談社）と信井洋子（のぶいようこ）理事（文京区を中心として活動している手話通訳士）のアドバイスと協力を得て、（社福）文京区社会福祉協議会に相談に行ったところ、即答で「良い活動ですので、是非ご紹介ください」と快諾を頂いた。

事前の説明会では、文京区社会福祉協議会の担当者から、「この市民活動まつりでは、来場者への活動紹介と共に、せっかくの機会なので、出展団体同志の交流も積極的に行ってほしい」旨の説明があった。その声掛けのお陰もあってか、準備の段取りや弊機構への来場者が詰めかけてしまった時も、隣り合わせたブースの方が誘導してくださったり、案内して下さったりして、終始和やかな雰囲気で出展することができた。

■「共用品クイズ」に挑戦

千代田区で展開した「共用品クイズ」が好評だったため、文京区でも展開したが、こちらも大変好評だった。

共用品の代表例であるシャンプーのギザギザや牛乳パックの切欠き、アルコール飲料の点字なども、知らない方も多く、来場して下さった高齢社から子どもまで熱心に見て、一様に共用品の配慮に感心していた。

（写真：クイズの答えを考えている大学生達）

また今回の展示会では、聴覚に障害のある子ども達の来場も多く、保護者や兄弟と共に共用品クイズを解いたり、視覚に障害のある人や、肢体不自由の人、高齢者にとって助かる共用品の工夫などに気付いたりしていた。

地域のイベントでは、これまでに出会えなかった方々と交流する機会が持てる。
今後も広く展開していきたいと思っている。

（森川美和（もりかわみわ））

（写真：手話でクイズを伝えるお母さん）

ISO/TC173/SC7でWG会議開催

―2014年10月６日～10日/ドイツ・ベルリン―

2014年10月６日から10日までドイツ・ベルリンのDIN（German Institute for Standardizationドイツ規格協会）においてISO/TC173/SC7（国際標準化機構／福祉用具専門委員会／アクセシブルデザイン分科委員会）の３つのWG会議が開催された。

３つのWG（規格を作成する作業グループ）はそれぞれWG3（トイレ操作部）、WG5（触知案内図）、WG6（公共空間の音案内）であり、WG3は「JIS S 0026 公共トイレにおける便房内操作部の形状、色配置及び器具の配置」をもととする「ISO 19026 公共トイレの壁面の洗浄ボタンと呼出しボタンの形状、色及び紙巻器を含めた配置」の規格を検討している。同様にWG5は「JIS T 0922 触知案内図の情報内容及び形状並びにその表示方法」をもととする「ISO 19028 JISと同名」の規格を、WG6は「JIS T 0902 公共空間に設置する移動支援用音案内」をもととする「ISO 19029 公共施設における聴覚的誘導信号」の規格を検討する。

会議は韓国、ドイツと日本のエキスパート（専門家）による会議となったが、活発な議論が行われた。

WG3（トイレ操作部）では、CD（委員会原案）投票の際に提出されたスペインのコメントの検討から始まった。洗浄ボタンと呼出しボタンの間隔については、現在の規格案がスペイン提案の寸法を包含していることを確認した。また床から100ミリの高さにロープを配置するべきであるという提案に対しては「もう一つの呼出しボタンまたは操作用引きひもを床から最低100ミリの高さに設置する」に変更することとした。CD投票後に提出された「ボタンの高さを規定に入れない」という日本からの提案については、出席したエキスパートの理解を得て、高さを規定しないで次のDIS（国際規格原案）投票への準備を行うこととした。

WG5（触知案内図）についてはCD（委員会）投票の際にドイツは反対投票をし、大量のコメントを提出したことから討議が困難になることが予想されていた。ドイツは触知案内図の記号の高さは最低0.5ミリでなければならないと強く主張し、特定の製法だけが実現できる寸法を国際規格に入れるべきではないという日本の主張と対立して、合意に至らなかった。この部分以外についてはお互いの主張を理解し、協力して文章の検討、修正を行った。合意に至らなかった点について、どちらの案をアクセシブルデザイン分科委員会（SC7）のメンバーが支持するかを決定するための委員会投票を行うこととなった。

WG6（公共空間の音案内）についてはCD（委員会原案）投票の際にもコメントはなく、問題なく進むことが予想されていた。「視覚障害者の表現を他のWGと統一すること」、「信号騒音比の箇所の文章を修正すること」、「スピーカーボックスに添付するマークに関する例は適当なマークがない場合はこの例を削除する」等の修正を行い、次のDIS投票への準備を進めることとした。

これらの規格に関しては、それぞれ2015年８月～10月をめどに、国際規格策定をめざし、作業が進められる。

（松岡光一）

視覚障害のある人の食生活を支え続けて

公益財団法人すこやか食生活協会30周年記念事業

（公財）すこやか食生活協会は、今年、創立30周年を迎えた。昭和59年に任意の団体として発足してから今日まで、視覚障害のある人の食生活の改善、自立支援を促進するために活動を続けている公益財団法人である。

■視覚障害のある人と高齢者の食生活

すこやか食生活協会は、視覚に障害のある人達の、食生活に関する負担軽減と自立支援等を目的として設立された。

同協会では、視覚障害のある人に、カセットテープ、テレフォンサービス、点字等で食生活に関する情報を提供。　近年では視覚障害のある人達の食生活の改善や自立支援の考え方が、高齢者の身体特性にもつながることから、活動の範囲を視覚障害のある人から高齢者へと広げ、活動を推進している。

■30周年事業
「視覚障害者の食生活自立体験コンクール」

30周年を記念して行われたコンクールは視覚障害に関する、実践体験を感想文としてまとめ応募するもの。応募作品は、「視覚障害のある人が健康で豊かな食生活を送り、自立と社会参加を果たしている視覚障害のある当事者の実践体験や、視覚に障害のある人達に支援活動を行っている個人またはグループの実践体験報告」が盛り込まれた内容であることが条件であった。

応募総数は57作品。日ごろ楽しく調理している工夫や、様々な人達と共に食事を楽しむなど機会への参加、様々な食べ物や器具などの情報入手の工夫等が寄せられた。

57作品のうち、農林水産大臣賞が１点、農林水産省消費・安全局長賞１点、すこやか食生活協会理事長賞３点の計５点が選ばれた。

■農林水産大臣賞「食を通じて社会参加」

本コンクールの最高賞である「農林水産大臣賞」に選ばれたのは、視覚障害のある当事者、本母圭悟（ほんぼけいご）さん。本母さんは、視覚障害のある人を中心にしたコミュニティグループのリーダー。メールを使ってメンバーに料理のレシピを紹介したり、料理の便利グッズの紹介をしたり、活発に社会参加をする様子を描いた。

「見えないから“できない”、“やらない”と言っていた人も、アクティブに頑張っている人達の影響を少しずつ受けて、“やってみようかな”、“行ってみようかな”と一歩踏み出すんですね。食の力は大きいです。」という言葉が印象的であった。

また、消費・安全局長賞には鈴木可奈子（すずきかなこ）さんの作品「有意義な食生活」が選ばれた。

鈴木さんは全盲で、ご主人も全盲である。普段の買い物は、スーパー、八百屋などの対面販売で顔を覚えてもらい商品情報を得ていたり、ネットスーパーを利用したりする時は、パソコンや携帯の音声読み上げソフトを使用。購入した後の商品は、バーコードで情報が読みとれるソフト等を利用して識別している。

さらに音声ガイドが付いた電化製品が非常に役立っていることや、パンやケーキを作る際に、重さや音声で知らせてくれる秤や、メニューやコース選択なども音声ガイドで確認できるホームベーカリーを大切に使っていること等を書いている。このコンクールで紹介されたたくさんの食生活のアイディアは、視覚障害のある人や高齢者だけでなく、より多くの人達にとっても役に立つものである。

（森川美和（もりかわみわ））

「社会の要請と共用品（その２：市場の失敗を補う）」

後藤芳一（ごとうよしかず）（日本福祉大学客員教授、東京大学大学院教授）

市場原理②④～⑥⑫⑱⑲㉚㉜～㉞㊱㊲㊴㊶㊸㊹㊼～㊿㊺㊻㊽㊿㊽㊽（小さい添え字①～㊸は、同様の用語が本講の第１～83講に既出であることを示す）に任せるままでは**社会的課題**①⑮⑱㉗㉘㉛㉜㊼㊸～㊻㊽～㊶㊸が解けない場合や、課題が拡大する際の対応としては、①行動ルールを変える（下の１と２）、②各主体が課題解決に向けて働きかける（同１（の一部）と３と４）、③市場を進化させる（同５）という方法がある。

１．政策的介入

公共性の大きさや課題の重さによっては**政府**①②④⑦⑧⑫⑱㉖～㉘㉚㉜㊴㊵㊿㊹㊼㊾㊸～㊸や国際機関自身が介入する。（１）法律や条約などで強制（例：**独占禁止法**㊸、**環境基本法**㊸～㊺㊼㊷～㊻㊿㊸㊸、**国連世界人権宣言**㊼～㊶㊸、同**障害者権利条約**③⑤⑧⑪⑫⑭⑰⑱㉒㉓㊱㊲㊵～㊹㊼㊿㊷㊹㊻㊼㊼～㊶㊸、同機構変動枠組条約、同**生物多様性条約**㊸㊹㊸）、**財政**㊶㊷㊹～㊻㊷㊸（例：幼稚産業の保護）、金融（例：重債務貧困国イニシアチブに基づく債務救済（IMF、世界銀行））、税制（例：環境税制）などの政策を講じる、（２）国際的な指針など（例：OECD多国籍企業行動指針、OECD／DAC環境と開発に関するガイドライン）で介入するなどの方法がある。

２．誘導的指針や枠組

課題に多様性があって、各取組み主体の工夫や柔軟な対応が必要な場合には、方法づけを与えて誘導する（例：指針、ガイドライン）ことが有効だ。政策的な強制策と企業の自発的取組みに委ねる方法の中間であり、ソフトローとも呼ばれる（例：サリバン原則、国連グローバルコンパクト、GRIガイドライン、SA8000（SAI）、SRI（社会（的）責任投資）、**ガイド71（ISO／IEC）**①②⑥⑩⑬㉑㉖～㉚㉝～㉟㊻㊼、SR26000（ISO））。今日的に生じている課題への対応策として、特に有効である。

３．企業が取組み

企業が自発的に社会的課題に取り組む。その動機は時代とともに深まりを増している。（１）必要条件としての要請を満たす義務的取組み（例：企業統治、企業倫理、行動規範、コンプライアンス、ダイバーシティー）、（２）自発的ではあるものの奉仕的な精神で責任を担う（例：フィランソロピー、メセナ、良き企業市民、環境報告書、カネギー、ロックフェラー）、（３）戦略的に分野を選んで事業モデルを組み、積極的に関与して課題の解決を図る（例：ボディショップ、マッチングギフト、ピンクリボン、テーブル・フォー・ツー、環境・社会報告書）、（４）経営や事業展開の一環としてマーケティングや全社の経営戦略に位置づけて展開（例：コーズ・マーケティング、統合報告書）などがある。

４．社会的事業

個人や非営利組織が社会的事業として長く取り組んできた。（１）慈善・社会事業（例：教会、寺、赤十字、NGO、NPO、マザー・テレサ、アムネスティ・インターナショナル、世界自然保護基金（WWF））、（２）社会的企業（**起業**㊾㊿㊷）として社会的課題の解決をめざして設置した企業や団体と、その取組み（例：ルビコン・プログラムズ、フェア・トレード、株主行動、グラミン銀行、グリーン・ベルト運動、ピープル・ツリー、ベアフット・カレッジ、ラ・ファヘダ、ティーチ・フォー・アメリカ）、（３）事業や経済との関わりのもとで、実業界で実績を持つ経営者が本格的に関わり、投資・事業として課題解決をめざす取組み（例：アショカ財団、パケルソフト、アヴィナ財団）がある。

５．市場を変える

①市場原理が市場の失敗を生むという伝統的問題に加え、②グローバル資本主義、株主資本主義など新自由主義（ここではネオリベラリズムの意味）は新たな社会的課題（例：格差、貧困）を生んでいる。今世紀の課題の中心は後者であり、新しい対応を求めている。

新しい価値軸を織り込む（例：トリプルボトムライン）、課題対応と事業性を折り合わせる（例：**アクセシブルデザイン**、**共用品**③⑥⑩⑬⑭⑯～㊲㊵㊷㊹～㊸）、新しい生活・消費の価値観や様式（例：オーガニック、LOHAS、ソトコト、スロー）を織り込むなどで市場原理を修正し、進化させる取組みがなされている。

■ルールを「作る」、ルールを「改定する」で、変えることができるコトやモノ

事務局長だより

星川（ほしかわ）安之（やすゆき）

■カードのアクセシビリティ

1991年に共用品を推進する目的で発足した「Ｅ＆Ｃプロジェクト」は発足直後、目の不自由な人達への日常生活に関する不便さ調査を行い、多くの不便さが明らかにした。「多くの種類があるプリペイドカードの識別ができない」もその中の一つ。同プロジェクト内に「カード班」が発足し、現在、共用品推進機構の理事である永井武志さんがリーダーとなり、プリペイドカードの触覚識別の日本工業規格（JIS）化まで漕ぎ着けた。

その後、カードの不便さは、クレジットカード、キャッシュカード等の不便さにもあるとことを明らかにした「カード班」は、国際標準化機構（ISO）でカードに関する国際規格作成を担当されていた寄本義一さん（凸版印刷）、中澤明さん（日本電産サンキョー）に相談し、バトンを渡すと共に、カード班も協力させていただいた。その後、寄本さんを中心としたプロジェクトは、多くの困難を乗り越え、クレジット及び銀行カードの右下に点字３文字分のスペースを確保し、自分のカードであること、及び方向・表裏を触って識別できる規格が2009年に国際規格として制定され更にJISとしても制定された。

寄本さんのプロジェクトは更に発展し、カードをさまざまな機器に挿入するかかざした場合、利用者の特性に合わせた仕様で表示される仕組みも国内外の規格として制定するに至った。

2014年11月、日本において国際電気標準化会議（IEC）の総会及び関係する多くの会議が東京の国際フォーラムにおいて12日間の会期で行われた。このカードシステムは、会場内の一角で展示され、関係者に実際に見て体験してもらうことができた。

展示会場には、ATM、タブレットなどが用意され、かざしたカードによって、言語を変えることができたり、字の表示が大きくなったりするのを海外からの参加者も関心を持ってみていただくこができた。

■ISO/IECガイド71の改定

2001年に日本提案で制定された「規格作成者のための高齢者・障害のある人々への配慮指針ISO/IECガイド71」は、３年の審議を経て、各国からの委員のコンセンサスを得て近々、発行されることになった。今回の議長は、前回のガイドを作成する時の提案者でもあり、事務局作業をしていた宮崎正浩さんが勤めた。改定版の作成は、ある意味道なき道を作るような困難が伴うことが多い。今回も、異なる意見が百出する中、宮崎さんが見事にまとめ上げてくださった。

2020年、東京ではオリンピック・パラリンピックが開催される。標準化に関する多くの努力と成果が大きな力になる時と思わる。

私事で大変恐縮だが、そんな時、思わぬご褒美「平成26年度工業標準化事業表彰」で、経済産業大臣賞をいただいた。もちろん周りの方々あっての賞であると認識している。更に気を引き締めて、進んでいく所存である。感謝。

共用品通信

【イベント】
［10月］
第41回H.C.R.国際福祉機器展（１～３日）
千代田福祉まつり（11日）

【会議】
［９月］
第１回AD適合性評価制度検討委員会（10日）
第１回TC173/SC7/WG5触知図委員会（11日）
第１回AD認証に関する既存JIS検討委員会（24日）
第１回TC173/SC7/WG3/WG6トイレ・音案内委員会（29日）
［10月］
第１回取扱説明書検討委員会（JIS）（2日）
第１回取扱説明書検討委員会（国際）（2日）
第１回操作性に関わるJIS原案検討委員会（国際）（３日）
第１回操作性に関わるJIS原案検討委員会（JIS）（３日）
第１回コンビニ調査委員会（30日）
第１回操作性WG委員会（31日）

【外部主催会議】
［９月］
第４回規格調整分科会（金丸、３日）
第１回標準第一部会（金丸、４日）
［10月］
第１回医工連携事業委員会（９日）
第１回ISO/TC173検討委員会（14日）

【講義・講演】
［９月］
日本福祉大学スクーリング・福岡（星川、森川、20・21日）
［10月］
日本大学芸術学部講義（森川、７日）
荒川区立赤土小学校共用品授業（森川、20日）
千代田区立御茶ノ水小学校共用品授業（森川、23日）
東京都立武蔵野北高等学校（森川、29日）
［11月］
シニアライフコーディネーター養成講座（星川、１日）

アクセシブルデザインの総合情報誌
インクル 第93号
2014（平成26）年11月25日発行
"Incl." vol.14 no.93
©The Accessible Design Foundation of Japan（The Kyoyo-Hin Foundation）, 2014
隔月刊、奇数月に発行
一般頒価　1部1000円
（但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています）
※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはPDFファイルのCD－Rを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行　（公財）共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿楽町2-5-4 OGAビル2F
電　話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373
Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人　鴨志田厚子
事務局　星川　安之
森川　美和
金丸　淳子
松岡　光一
三好　　泉
田窪　友和
本田　和枝
青山　泰隆

執筆・協力（五十音順）　後藤　芳一
関戸　菜美
中野奈津美

印刷・製本　サンパートナーズ㈱
本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形では利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、共用品推進機構までご連絡ください。
上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。